

口-207

癌性胸膜炎および結核性胸膜炎患者の胸水、血清中の免疫抑制酸性蛋白 (IAP) について

名古屋大学第1内科

○丹羽義置, 岸本広次, 森瀬雅典, 下方 薫

免疫抑制酸性蛋白 (IAP) は 1977 年松田により見出された等電点 3.0~3.3, 分子量 59,000 の免疫抑制作用を有する糖蛋白である。諸家の報告によると正常人血清中 IAP は 500 μ g/ml 以下であり, 肺癌患者血清では平均値が 680~956 μ g/ml と高値を示し, 病期の進行とともに上昇することが明らかにされている。今回我々は癌性および結核性胸膜炎患者の胸水, 血清中 IAP を測定し, 他の腫瘍マーカーと比較検討した。

対象および方法 胸膜生検または胸水中の癌細胞, 結核菌の存在により診断された癌性胸膜炎患者 22 例, 結核性胸膜炎症例 22 例の胸水, 血清中の IAP, α_1 酸性糖蛋白 (α_1 AG), CEA, ADA, フェリチンを測定した。IAP は免疫拡散法 (細菌化学研究所), α_1 AG は免疫拡散法, CEA は RIA (サンドイッチ法, ダイナボット社), ADA はアンモニア定量法, フェリチンは RIA (チューブ固相法, トラペノール社) により定量した。

結果 ①癌性胸膜炎患者の胸水中 IAP は 603 ± 244 μ g/ml (mean \pm SD), α_1 AG は 102 ± 42 mg/dl, CEA は 19.3 ± 19.6 ng/ml, ADA は 14.9 ± 11.0 U/L, フェリチンは 1243 ± 2093 ng/ml, 結核性胸膜炎患者の胸水中 IAP は 874 ± 170 , α_1 AG は 146 ± 40 , CEA は 1.4 ± 0.5 , ADA は 37.9 ± 11.4 , フェリチンは 770 ± 631 であった。②癌性胸膜炎症例の血清中 IAP は 1040 ± 343 , α_1 AG は 168 ± 51 , CEA は 5.7 ± 5.1 , ADA は 12.1 ± 3.0 , フェリチンは 252 ± 109 , 結核性胸膜炎患者の血清 IAP は 999 ± 258 , α_1 AG は 184 ± 42 , CEA は 1.7 ± 0.6 , ADA は 14.2 ± 2.6 , フェリチンは 233 ± 152 であった。

胸水中の IAP は結核が癌よりも有意に高い ($P < 0.001$) が, 血清では癌性と結核性胸膜炎例との間に差が認められなかった。癌性, 結核性胸膜炎患者の血清, 胸水それぞれについて IAP と α_1 AG は相関した。

考案 肺癌と肺結核の間で血清中 IAP 値の差がないことは荒木により報告されているが, 胸膜炎症例の血清でも同様であった。胸水中では結核例が有意に高く, 癌性胸水で 600 μ g/ml を越える例は 22 例中 13 例, 59% であるのに対し, 結核性胸水では 22 例全例が 600 μ g/ml を越えている。600 μ g/ml 以下の胸水 IAP 値をとる胸膜炎例では結核の可能性が小さく, 鑑別診断に有用と考えられる。

口-208

肺癌におけるカルシトニンの腫瘍組織中濃度および免疫組織学的検討

浜松医科大学 第二内科

○佐藤篤彦, 千田金吾, 早川啓史, 谷口正美
本田和徳, 今井弘行, 大郷勝三, 吉見輝也
同第一病理 森田豊彦

〔目的〕第23回肺癌学会総会にて, 血中および腫瘍組織中のカルシトニン (CT) 値を測定し, 有用な腫瘍マーカーであることを報告してきた。今回, 腫瘍組織及び非腫瘍組織中濃度を測定するとともに腫瘍組織中の CT 抗原局在部を免疫組織学的に検討を加え, 血中 CT の上昇の機序に解明を試みた。

〔方法〕腫瘍組織中の CT の抽出はアセトン酢酸法で行い, 蛋白濃度の測定を牛血清アルブミンを標準として Lowry 法で行った。組織および細胞内の抗原局在の有無は, パラフィン包埋肺癌組織切片を材料として, PAP (peroxidase-anti-peroxidase complex 法; Histo-set) 法により検出した。

〔対象および結果〕外科的切除例または剖検例で組織型が明らかな 16 例 (類表皮癌 6 例, 腺癌 5 例, 小細胞癌 4 例, 大細胞癌 1 例) を対象とした。なお PAP 法陽性の判定は, 甲状腺組織と正常肺組織の染色に基づき, 細胞質内が明らかに染色されたものを陽性とした。

正常肺組織では, 気管支壁の基底膜に接して陽性細胞が散在し, Kulschitzky cell の存在部位に一致していた。肺癌組織 16 例の検討では 2 例に PAP 陽性所見を得た。

症例 1: 65 才, 女。肺嚢胞細胞癌で血中 CT の最高濃度は 318.4 pg/ml, 剖検時 138.4 pg/ml, 腫瘍組織内 CT 濃度 17.835 ng/wet g tissue であった。PAP 法光顕所見は, 胞体が spotty に淡く染まる細胞集団が存し, その細胞は紡錘形配列をとり比較的大型で, 他の細胞より胞体が発達し, 核もやや大であった。

症例 2: 72 才, 男。類表皮癌で, 剖検時血中 CT 値は 257 pg/ml であった, 癌細胞中に少数の PAP 法で染色される細胞が散在性に認められた。

〔考按〕肺癌 54 例の血中 CT 値の陽性率は, 53.7% (小細胞癌 90%, 大細胞癌 66.7%, 類表皮癌 21.1%) であったが, PAP 法では 16 例中 2 例のみ陽性であった。かかる結果は, 剖検肺が 15 例を占めており, 生前の治療のため K cell の減少の可能性があること, また腫瘍内には, Precursor を含む種々の分子量の CT の存在が示唆される。今後は新鮮な手術症例の検討にて血中 CT 上昇の機序が更に明らかにされるであろう。